

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：Antonia Markoviti (アントニア・マルコヴィティ)
- (2) 年 齢：27 歳
- (3) 参加事業：平成 30 年度 明治 150 年記念「世界青年の船」事業
(※SWY31 相当) 参加青年 (2018 年度)
- (4) 職 業：弁護士、テック系法律コンサルタント、観光関連業務



■ 応募のきっかけ

世界船に参加する前は、私の母が日本人とペンパルだったことから、家によく日本からの物が届いていたので、日本は私にとって、遠いけれど特別な国、という印象でした。その後、文献から日本について知ったり、兄弟が日本の歌に興味を持って聴くことがあったり、弁護士としては日本が国際関係を確立しているという印象を持っていました。「世界青年の船」事業（以下「世界船」という。）は、私がチェックしていた全ての青少年関連のウェブページに募集の告知がされていました。これまで 7 回ギリシャが参加として選ばれていますが、最後の第 31 回世界船が最も競争率が高かったようです。と言うのも、Facebook や Instagram などのソーシャルメディアが普及したことで、爆発的に広がったためです。事後活動組織、日本国大使館、ギリシャ教育省がギリシャ参加青年の募集告知を展開し、欧州の NGO や青年団体などにも募集告知が掲載されました。この効果が絶大だったため、今日でも「世界船 (SWY)」という名前が、ギリシャの若者に知れ渡っています。11 名の参加枠に応募者は正式に受理されたもので 800 名だったと聞いています。

私が応募を決めた最大のきっかけは、世界船のもつ多様性でした。**参加国、訪問国、そして活動の多様性**があり、一目見て、多面的に充実したプログラムであることが分かりました。新しい文化をどこまで深めて探求できるか分からなかった私にとって、事業は期待を超えるものでしたし、**世界船全体の強固なネットワーク**も見とれました。私のキャリアにとって最も有益だったのは、**異なる国や大陸の人々の人間としての行動のちがいを、同じ枠組みの中で知ることができた点**です。例えば、特定の活動に対して、どう反応するか、友情をどう築くか、ギフトを受け取った時どう感謝の気持ちを示すか、などです。

観光の分野でも、新たな視点を得たようですね。

私は副業でレンタル・観光関連活動をしており、世界船を通じてマーケティング戦略の多角的実施に当たって考慮すべき**全体的 (ホリスティック) アプローチ**を得ました。これまでは欧州の観光客に向けて、伝統的なプロモーションしかできていませんでしたが、船内で「販売促進マーケティングと文化アントレプレナーシップ」についてワークショップをした時に、参加青年からたくさん学ぶことができました。どのような文化活動を取り入れたらいいか、どんなソーシャルメディアを活用しているか、どうプロダクトを強化することができるかについて話し合いました。例えば日本の青年に「海外旅行に行くとしたらヨーロッパ、アメリカ、オセアニア？そしてその地域を選んだ理由は？」と聞き、意見交換を行いました。私は世界船で多くの文化と接することにより、それぞれのニーズに合った商品やサービスを企画したいと思うようになりました。具体的には、2015 年以降、ヨーロッパでは格安エアラインの新興により、欧州内の旅行、また同じ観光地に複数回行くことが一般的でした

が、観光ニーズも多様化しており、パンデミック後はエシカルな観光、オルタナティブな観光が求められると考えます。これまでとは異なり視野を広げずでこれらに先行している国から学ぶようになりました。

■ 職業とのさらなる結びつき

また、自分の出身であるヨーロッパ以外の文化にも興味と知識を持つようになり、自分の職業開発のターゲットとして取り込みたいと考えています。具体的には、私の現在の仕事と、特に力を入れている「スマートシティ」について、これらの国の専門家とどのように連携するかシナリオを考え続けています。私は、世界船の多様性、そして日本や多くの参加青年がテクノロジーにフォーカスしていることにとっても魅力を感じました。そのことが自分の研究分野を広げることとなり、台頭するテクノロジーをより理解できるよう、法律とデジタル経済に関する修士号を取得することにしました。世界船参加以前から法律を専門にしていたのですが、下船後、「本当にやりたいのは法律なのか」と疑問に思うこともありましたが、しかし色々な人と話す中で、私の関心のある分野、特にテクノロジーと観光において、法律の知識を組み合わせれば良いのだと分かりました。「スマートシティ」にはその全てが関連しています。規制が法律に関係し、テクノロジーがあり、観光の要素もあります。**世界船によって、私の専門性には「引き金になる部分がある、世界船と一緒に参加した 200 人の経験を相互関連させていけばいい」と気付かされたのです。**その点、日本のテクノロジーやスタートアップの話も大変参考になりました。「スマートシティ」とは、都市だけでなく特定の環境や地域にも当てはまるのですが、最新のテクノロジーを活用し、よりサステナブルでエシカル、グリーンな成果を生む、人々が魅力的と思うような社会を指します。私がより好ましいと思うのは、大きなまちづくりよりも小さなまちづくりで、テクノロジーによりインセンティブが与えられれば、人は小さい町にも魅力を感じるようになる、小さい町がテクノロジーを使い、観光や文化の力で町の中心を守っていくか、に関心があります。今は修士課程を終えて、家業の弁護士を始めたところです。

■ 期間とまとまりが、世界船の特徴

世界船が日本政府内閣府主催であることは、全く別の価値を生んでいます。なぜなら、ユースワークやソフトスキル・プロジェクトを過小評価している国もあるからです。世界船によって、若い参加青年たちはプロフェッショナルな成果を得て、対人スキルが職場でも大いに役立つことを社会に証明する機会を得られるのです。他の国際交流事業とのもう一つの大きな違いは、その「期間」と「結合力（まとまり）」です。世界船は、価値観を形成するにおいて非常に論理的な期間であり、しかも参加青年を飽きさせることがありません。類似の事業は通常、期間が短く、また参加費の一部がカバーされるのみであり、一方で留学は期間が長いですが、「まとまり」がありません。参加を決めるには、自分のライフステージ、金銭面も含めさまざまなファクターがあります。自分自身を振り返ると、国際交流が初めてだった頃は少しでも参加費用を払い、自分の経験とし、履歴書に書けるように、と考えていた時期はあり、そのことで自信が付き、より大きなプログラムに挑戦できるようになったという事実はあります。今の私であれば、ユニークなプログラム、特別なプログラムを優先し、参加費を部分的に払ってでも参加したいと思ひますし、世界船で得たものの少しでも恩返しができるのであれば、主催者や事後活動組織への寄付を喜んでしたいと思ひます。

船を使用していることも、大きな特徴ですね。

船を使うことの必要性も大変重要です。まず、参加青年が集中でき、活動への参加を見送るようなことがありません。次に、世界船は船や海と密接に結びついており、ブランド（世界船を世界船たらしめるもの）として重要です。そのおかげで、船や海が第三者に与える視覚的なインパクトが大きく、誰もがもっと知りたいと思うようになるのです。

■ 日本の印象

日本の印象については、日本が自国の文化普及にかけてアドバンテージがあることは、事実でしょう。しかし、世界船では、私たちがこれまで知らなかった詳細事項や習慣を学び、さらに自分たちで気づけるようになるためのきっかけが用意されていました。世界船に参加して、日本文化がより見えるようになり、身近になったと思います。身近と言っても大袈裟ではないのは、私は2日に1度は日本青年の友人と話をしていますし、歌もよく聞いているので、日本語は分からなくても言葉をキャッチする耳になっているのです。よって、私は日本文化をこれまでよりよく理解していると言えます。



徳島県のホームステイで、ホストファミリーの祖母所有の着物を着用して、茶道を体験する筆者

私は食べ物やワインに興味があるので、日本のレシピや、あまりメジャーでない食べ物に対しても、とても関心があります。今では、ラーメンの種類があることもよく知っていますし、味噌を買って自宅で調理したりもしています。また、踊りや地方の文化にも興味があり、徳島県へのホームステイをしましたので、阿波踊りを習い、さんさ踊り、ソーラン節も知り、日本の地理にも詳しくなりました。日本に一般的に関心がある人に向けて、このような特定の情報を伝えることにより、もっと関心を持ってもらうことができます。

日本文化には、一定の強みがありそうですね。

実際、世界船を通じて、日本の文化外交への意識の高さに感服します。私の意見では、日本は文化外交を促進する一連の実践の中で、最良事例として機能していると言えます。同時に、世界船では、世界船について、そして日本についての民間の文化大使として活動する方法を教えてくださいました。この役割を果たすことで、日本の文化、歴史、芸術、地理、食文化、その他多くの分野についての知識を深められ、とても光栄に思います。私の視点や、世界船が私個人に与えた影響を傍に置いたとしても、世界船がその他大勢の参加青年の人生を、様々な意味で変えたという話を、何十回と聞きました。同時に、そのような話を聞かたびに、自分もその一部であることに誇りを感じるのです。

■ クラブや自主活動でリーダーシップを発揮

船内で最も勉強になったのは、**クラブ活動**や、自由時間に参加者が企画する**自主活動**の数々でした。この2つが際立っていた理由は、文化と密接に関係しているからです。これらの活動を通して、生活のあらゆる場面で、また仕事や趣味の傍らで、**異文化を取り入れることの重要性**、そしてそれが自分のみならず他者にとってもいかに有益かを、理解することができました。第31回世界船では新しい習慣や文化的なスキルを発見する機会を得て、その後参加国の青年に話しかけ、彼らの文化を理解することで、よりスムーズに社会的にやりとりでき、話し合いに影響を与えることができました。その意味で、私がどう他者と関係性を築くかということに役立ちました。同時に、自主活動は、期日（私たちの場合はプログラム終了時）に迫られながら、リーダーとしてこの時間を使おうと行動できることを証明しました。喜びと知識を他者に提供しようと、思いがけない活動でも思いついて実行に移した人たちに感心しました。このように、自分の趣味に熱中し、思いを共有しようとする姿勢は、私のリーダーとしての資質にもプラスに働きました。なぜなら、そこに広がる人々の多様性はとてつもなく大きく、それを受け入れ、**できるだけ多くの人々を取り込むには多方面から動く必要がある**と、改めて実感したからです。

具体的には、どうリーダーシップを発揮したのですか。

私のリーダーシップは、まず一つに、ギリシャ代表団の中で発揮されました。ギリシャ青年一人ひとりの背景、考え方や性格が違い、まとめる中で仲間から「あなたは世界船に似たプログラムの経験もあるし、ユースワークにも詳しいからよく分かっているでしょ」と言われたこともありましたが、「世界船は数日間のプログラムではなく、1ヶ月半一緒にいるもの。この事業の成功や、ギリシャ代表団の成功は、**全員が自分を出し切ることにある**」と説得したのです。同じギリシャ人でも違った考えの人がいますが、実はそのような多様性は必要で、そのことを理解していたというのはリーダーシップを発揮する理由になったと思います。もう一つは、ギリシャのもう一人の青年と行った世界船のビデオを制作するというプロジェクトについてです。ある日、キャビンで一息ついていた時に、世界船について書き留めておこうと思ったことがあり、「SWY gives me so much. How can I give back? (世界船は私にたくさんのを与えてくれた。私はどう恩返しができるか?)」そして、良い作品を作れば、それが世界船のためになり、将来の参加青年のためになる、と思いました。誰かに「世界船とは何ですか?」と聞かれても、シンプルに答えるのは難しいものです。だからこそ、視覚に訴える動画を作ることで、たくさん与えてもらった世界船に報いることができるのではと考えました。



第31回世界船のギリシャ代表団（筆者左から2番目）

■ 寄港地で歓待を受け、人々の暮らしに触れる

最も印象に残っているのは、寄港地ではなく、給油地ソロモン諸島での出来事です。第 32 回世界船ではソロモン諸島からの参加者がいましたので、彼らと船で仲良くなった後、彼らの家族や彼らの暮らす場所を見ることができ、最高の気分になりました。また、ソロモン諸島の世界青年の船事後活動組織の既参加青年らと一日を過ごせたことにも感謝しています。地元の土産品をいただいたり、当時の世界船の写真を見せてくださったり、私が地元紙の取材を受けるよう、アレンジしてくれたりしました。この人と人とのつながりが、私の母国から遠く離れ、ほとんどのギリシャ人が知らないであろうソロモン諸島という素晴らしい国のホスピタリティを、描き出していました。世界船のもう一つのユニークな点として、**世界船ではたくさんの文化が等しく取り上げられ、事業後に私たちはその国の広報大使として活動することになります。**

他国の文化に触れる中で、自国の文化についてはどんな発見がありましたか。

私の住む地域は赤ワインの生産地なのですが、ギリシャの他の生産地のワインを試してみる機会になりました。そして自国のナショナル・プレゼンテーションでギリシャ各地のワインを紹介したことをきっかけに、私はギリシャ全土のワインについて詳しくなりました。また、船で旅したことにより、海、船旅、船舶にも関心を持つようになりました。ある日船上で、満天の星を見上げた時に、私は今別の惑星にいるのでは、と思った時がありました。そしてキャビンに戻り、海や海兵がよく詩に登場するのは、こういった理由からだ、と思ったのです。ギリシャも海が近く、多くの船を所有しており、世界船終了後も、海について詠んだギリシャの詩人の作品を読んだりします。

■ 事後活動で世界船とつながる

大きさに聞こえるかもしれませんが、世界船に参加して以来、私は世界船とずっと共にあり、また世界船も私とずっと共にありました。世界船による影響や世界船から得られた恵みは、ほぼ毎日、私の生活の中に見出しています。世界戦の募集の時から、事後活動組織は大変努力して、私たちの事前準備にも関わってくれました。何度か一緒にミーティングをし、何をプレゼンするか話し合ったり、協賛活動にも関わってくれたりしました。前回の参加者から情報を共有してもらうことはとても役立ちますし、私も次の参加者には同じように関わりたいと思っています。ですから、事後活動組織への参加はとても自然な流れでしたし、卒業生ですから毎日アクティブに活動するという類の集まりではなく、私たちの団結を見せるための集まり、というふうに捉えています。まず、私が世界船に参加した直後、私はギリシャの世界青年の船事後活動組織の渉外担当副会長に選出され、組織と密接に関係するようになりました。この機会を得て、ギリシャでのネットワークに情報提供するために必要な最新情報を受け取ることができました。また、今後新しい参加青年、新しいスポンサーを得ていけるよう、オンライン・イベントを開催したりしました。パンデミック期間はオンラインの活動しかできませんので、主に世界船の広報に努めました。世界船をたくさんの人に知っていただくのは、すばらしいことです。私がもう一つやりたいことは、事後活動組織で何らかのローカルな催しを企画し、日本国大使館や日本関連団体を絡めるということです。2 年前にアテネでジャパン・ウィークという文化イベントがありましたが、ここまで大規模ではなくても、週末の 2 日間を使って茶道の先生を呼び、茶道を経験してもらい、体験できるイベントなどを企画したいです。日本青年がギリシャに来てくれる時には、ワークショップを企画したりもしたいです。



アテネでのジャパン・ウィークでの既参加青年ら（2019年）

メディアを通じた広報活動もされたんですね。

私はソーシャルメディアに積極的に参画し、放送業界にも私の世界船での経験を紹介してもらえないかと働きかけました。同期の仲間と一緒に、ギリシャの新聞、雑誌、ラジオ、テレビで世界船を紹介することができました。第31回のもう一人のギリシャ参加青年と一緒に作ったビデオは、新しい世代に世界船を知ってもらうために、世界船ネットワークの国々で活用してもらっています。



雑誌の2ページにわたり、筆者ともう1名の参加青年への取材が掲載された

同期との連絡、個人的な繋がりはどのように保っていますか。

私は同期の仲間と密接に連絡を取り合っており、毎週多くの人と話しています。3人の日本人がすでに私の故郷を訪れ、私は旅行先で世界船既参加青年に会うようにしています。イスラエルのエルサレムでは日本青年に、ドミニカ共和国のサントドミンゴでは第5回参加の既参加青年に会いました。第5回の参加なのに、まるで昨年のように船の経験を語ってくれ、世界船の経験はこんなにも色褪せないものかと、魔法のように思いました。ポルトガルに住んでいた時、日本文化を紹介する地元の団体と密接に連絡を取り、ポルトガルはまだ世界船の参加国ではないことから、世界船に関するプレゼンテーションを実施したことがあります。私は、1か月以上滞在する場所では、必ず現地の日本国大使館にメッセージを送り、応募者や参加者に自分の見識を共有したいという意欲を伝えています。このような活動の例を通して、私が世界船を広報しようとする熱意が伝われば幸いです。

アントニア・マルコヴィチ氏のプロフィール

弁護士。25歳で第31回「世界青年の船」事業に参加。2019年に大学法学部卒業、2021年にはポルトガルのカトリカ・グローバル・スクール・オブ・ローとアメリカ合衆国のデューク大学で法学・デジタル経済修士課程に学ぶ。現在、弁護士として活躍し、テクノロジーとスマートシティが注力分野。また、文化系レンタル（文化体験）サービスを運営し、ギリシャの観光プロジェクトを推進している。世界青年の船事後活動組織の副会長を務める傍ら、欧州のユースワーク活動に参加、欧州法学生協会の卒業生としても活躍中。